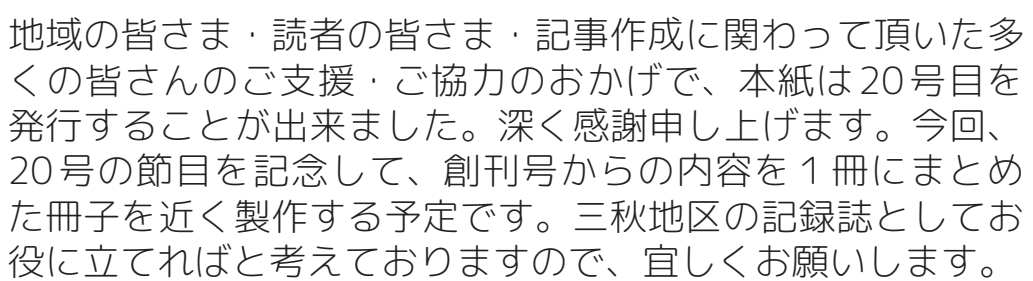


第
20
号

公式HP  <https://www.miaki.org>



スリムな黒いトンボ

(文責) 日山 貞治



黒い羽が特徴のハグロトンボ

7月中旬から8月上旬にかけて、城ヶ端地区の三秋川周辺で、黒いトンボが見られます。黒いトンボは、ハグロトンボで別名ホソホソトンボとも呼ばれています。

羽は、普通のトンボのような透明でなく真っ黒です。胴体は、とても細長くスリムです。羽ばたき方も他のトンボと違って、蝶のようにひらひらと舞うようにゆっくりと飛びます。留まって羽を休めるときも、蝶のように4枚の羽を重ねて閉じた状態で休みます。

ハグロトンボは、真っ黒い姿から、不吉と思われるがちですが、実はとても幸運なんです。昔から、黒いトンボは、神様の遣いとして大切にされ、縁起が良いとされています。

雄は、胴体の部分がエメラルドグリーンのように光沢がありとてもきれいです。雌は、全体が黒い色をしています。トンボは、田んぼや畑の害虫を食べくれる益虫です。そっと見守ってあげましょう。



全体黒っぽいのが特徴のメス



胴体のエメラルドグリーンが特徴のオス

三秋信号所跡

(文責) 日山 貞治



信号所跡

かつて、日本国有鉄道と呼ばれていた国鉄の予讃本線(現在JR四国の予讃線)の信号

麦秋とユスラウメ

(文責) 稲多 勝利

私は、5年くらい前に、庭にユスラウメ(以下ユスラ)を植えました。今年は、木も成長し、たくさん赤い実が付きました。昔は、近所のどの家にもユスラがあつて、赤い実が生ると、もろって食べたり、お菓子やスイーツが豊富になった時代、これが子どものおやつでした。なぜ「麦秋」を取り上げたかと言いますと、昔は、どの農家でも麦を作っていました。そして、麦が黄金色に熟れてくると、休みの日には麦刈り、麦こぎのお手伝いをしたものです。そして、その時の休憩の楽しみが、ユスラだったのです。女の子は、麦わらを編んで作った「カゴ」に赤いユスラの実をいっぱい入れていました。経験のある人は、お分かりでしょうか、麦の収穫のお手伝いは、「ハシカイ」(※身体が痛痒くなることの方



基準点

端集会所の近くにある、コンクリート製の水田畦畔に、記録的な渇水の場合、中予分水事業として、脇川水系から明神山を貫通するパイプラインを設置し、松山地域に水を送る計画がありました。

そのため、平成6年1月に中予広域水道企業団(当時の中予地域の3市5町)が組織され、測量を実施した痕跡の2級基準点の測量標が残されています。

2級基準点は、真鍮製で直径8cmです。501の番号が刻印され、中予広域水道企業団の文字もあります。反対側の畑の畦畔上にも、準拠点のステンレス製の測量鉾(直径5cm)が打たれています。中予広域水道企業団は、平成20年3月31日をもって解散されています。



準拠点



ユスラウメ

端の測量標跡

(文責) 日山 貞治

水之明神社の石灯籠

(文責) 日山 貞治

灯籠は、もともと仏前に供える灯明台として中国より仏教とともに伝わったもので、仏堂の前に一基のみ建立していました。平安時代以降、神社にも建てられるようになり、室町時代以降は、左右に一対建てられるようになり、一般的に構成は、上から宝珠・笠・火袋・中台・竿・基礎の六部構造になっています。

奉納されている灯籠は、一般的な春日灯籠で、高さは六尺半(二m九十五cm)の花崗岩製です。中台の側面が、それぞれ格狭間と菱形紋になっていす。拝殿に向かって右側の竿の部分に昭和三十三年(一九五八)高岡浅吉、世話人仙波米太郎。左側の竿には当字中とあります。近くには、それ以前にあった春日灯籠の残欠が置かれています。



灯籠石

コウモリ洞と砥部焼

(文責) 原田 浩明

本紙にて以前(第2、5号)取り上げたコウモリ洞について、新たな情報をキャッチしました。これまで、コウモリが生息し、独特な雰囲気醸し出している洞窟、砥部焼の原料「杉野文助」らによって、江戸時代中期に釉石(陶磁器の釉薬の原料)が発見された



畑で住民にインタビューする学生達

6月17、18日の2日間、愛媛大学社会共創学部(約20人)が、大学の活動の基礎的な方法を理解し、習得することを目的に活動を行いました。4、5人のグループに分かれ、各グループが区内を散策、時に、住民の方からお話を伺いながら、「三秋の歴史を踏まえ、三秋の未来を考える」という課題に取り組みしていました。



お堂の前で住民から歴史について聞く学生達



2日間の活動を終えての成果発表



玉井住職から話を聞く学生達

三秋フェア2023

(文責) 原田 浩明

毎年恒例の「三秋フェア」が、今年も8月13日に「手作り交流市場町家」にて、開催されました。本イベントの定番となったキュウリの詰め放題や三秋産農産物の直売が行われ、多くの市民の皆さんが訪れていました。また今年は、6月の「ホタル観賞会」で作った竹あかりやレンコンの花も展示し、三秋をPR。中には、「昨年も来ました」という市民の方もいて、このイベント



竹あかりを展示



レンコンの花生けてみました



キュウリの詰め放題

が少しずつではありますが、浸透してきているのだと感じました。

みあき写真館

(写真) 日山 貞治

【タイトル】三秋新池からの夜景

三秋地区で、伊予市内の町中の風景が見られる場所としては、三秋大池の堤防からや、明神山の中腹、高速道路の跨道橋である三秋橋から見る事ができることは、以前『みあき新聞』で紹介しましたが、今回は、大平地区との境にある三秋新池の堤防からの風景を紹介します。



新池からの市内(昼)

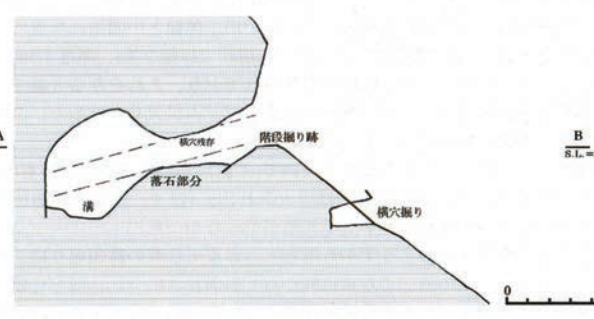
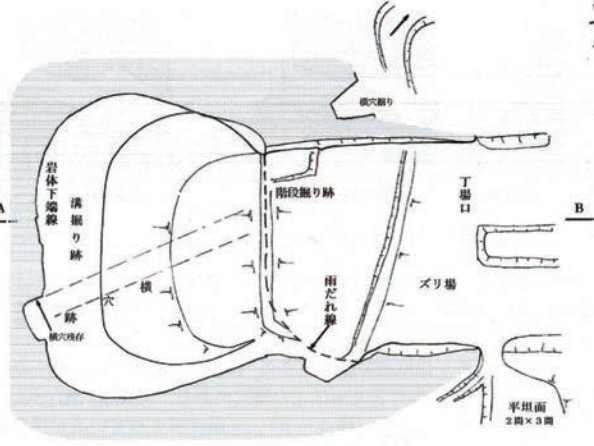


図3 コウモリ洞構造図 上:平面図 下:断面図

「伊予市コウモリ洞軸石採掘遺跡」2022年『遺跡』(159号)より引用



2016年11月に撮影したコウモリ洞

参考文獻
十亀幸雄2022年「伊予市コウモリ洞軸石採掘遺跡」『遺跡』(159号) 遺跡発行会

場所であるということを紹介しました。そんな折、このコウモリ洞を詳しく調査した報告書を手。早速、報告書の執筆者である十亀幸雄さんに会いに行き、内容について伺ってきました。

十亀さんによると、以前から、文献等で三秋に釉石が採掘された所があることを知っていたが、正確な場所が分からず、手ばかりの洞窟を取ら上げたことを知ったことがきっかけで、現地調査を開始。コウモリ洞の内部構造を詳しく調べ、報告書にまとめたこと。同時期に採掘された類似点が多く見られること。洞が杉野文助らによって発見された採掘場の可能性が非常に高いことで、今後、更なる調査が行われ、証拠となる新たな発見があれば、重要文化財に指定される可能性があること。

新池からの夜景

